一行傳の研究——支那古今人物略傳（四）

春日禮智

一

凡そ人の眞價は棺を蔽うて然る後知ると言はれてゐるが、併しその人が沒してから隨分長い日月を經過し乍ら尙ほその人の眞價が正當に評價せられない場合も決して少くない。佛敎に於ける沙門が佛敎史上と一般文化史上の兩途に亘つて偉大な功績を遺し乍ら、何れの方面からもその存在價値が充分認められないといつた場合の如きもその一である。沙門一行は、唐の高宗の弘道元年（六八三）より玄宗の開元十五年（七二七）に至る僅か四十五年の間生存し乍ら、その密敎史上と天文曆學史上に遺した足跡の偉大さは、唐僧中屈指の大人物であり、しがもその佛敎界に寄與した貢献は一般社會に認められず、又その文化史上に遺した足跡の偉大さは佛敎界に於いて理解せられないといふ、いはゞ斯うした不遇の一人であると思はれる。かゝる現象は一行ばかりでなく、例へば唐代の沙門にして文學者として有名な杼山集十卷の作者皎然、禪月集二十五卷の作者貫休、白蓮集十卷の作者齊己の如きも、その功績は佛敎界、文學史上共に未だ充分認識せられてゐないやうに考へられる。一行の場合に於いては、彼の天文曆術に關する功績は全く佛敎學者のこの種の科學に對する熱意が缺けてゐるため不問に附せられてあり、その密敎に關する貢献は一般學者の顧る所とならず、結局その傳の如きも①二三の古い研究はあるにしても、未だ此が本格的研究はなされてゐなかつたようである。其故私はこゝでは、かゝる埋れたる高僧の傳記、行績を明らかにしたい意欲の下に、些か一行の傳記に就いて貧しい考察を加へて見たいと思ふものである。

二

一行傳として從來知られてゐるものは舊唐書一九一列傳一四一、宋高僧傳五所收の彼の本傳であつて、此の外釋門正統八、佛祖歷代通載一三、六學僧傳五、全唐文九一四等にまとまつた傳記が載つてゐるが、その多くは舊唐書、宋高僧傳の踏襲と言つてもよい位のものである。然るに茲に注意せねばならぬことは、舊唐書は後晉の高祖天福五年(五四〇)に、張昭遠等の史官に詔して唐史を編纂せしめ、出帝の開運二年(九四五)宰臣劉昫が此を奉つたものであり、又宋高僧傳は宋の太宗の太平興國七年(九八二)通慧大師贊寧が勅旨を奉じた編纂にかゝり、端拱元年(九八八)にでき上つて之を進上したものであつて、更に其より遙かに古い唐代の記錄に、之と同種の記事が夥しく散見せられるのである。その最も代表的なものは、文宗武宗宣宗懿宗の朝に生存してゐたと思はれる段成式の酉陽雜俎であつて、本書の中には、一行の生涯に關する逸話の大部分が既に收錄されてゐるのである。又宋の太宗の太平興國二年(九七七)に李昉等が勅を奉じて編纂にかゝつたといふ太平廣記には、大唐傳載を始め、大唐新語、松窻雜錄、酉陽雜俎、明皇雜錄、開天傳信記等の古逸書が引かれて居り、その文章も殆んど皆大同小異であるが、此等が殆んどそのまゝ一行の本傳に採り入れられたであらうことは、其等の文章を一讀すれば容易に認められる所である。大唐傳載はその撰者は詳かでないが、その逸文一卷は守山閣叢書子部に收められてゐる。大唐新語は唐の劉肅の撰であつて、重較說郛弓第四十八には一卷の輯逸書があるが、一行に關する記事は見えず、稗海第二套所收の十三卷本に之が見えてゐる。松窻雜錄は今李濬の一卷本が原本說郛卷三、同四十六、顧氏文房小說、奇晉齋叢書に收められてゐる。然るに此に就いては重較說郛弓第四十六に杜荀鶴の松窻雜錄一卷が載せてあり、その中に李濬の本と同じ文章が收められてゐる。杜荀鶴のは貴池先哲遺書唐人集第七唐風集後、重較說郛弓第四十六、五朝小說唐人百家小說偏錄家、原本說郛卷四の中に松窻雜記一卷が收められてあり、此には一行の記事は見えないが、上述の重較說郛弓第四十六に又杜荀鶴の松窻雜錄一卷が載せてあり、此には一行の記事が李濬の雜錄の文そのまゝに載せてある。松窻雜錄か松窻雜記か、李濬の撰か

杜荀鶴の撰か、今此を決定することは遽かに容易ではないが、何れにしても其は酉陽雜俎の撰述年代と餘りかけ離れてゐない時代の製作であつたと思はれるものである。次に明皇雜錄は唐の宣宗の大中九年(八五五)祕書省校書郎鄭處誨が玄宗皇帝の遺事を雜錄したもので、現在原本說郛卷三、同三二、墨海金壺子部、守山閣叢書子部に二卷本が收められ、殊に墨海金壺本と守山閣叢書本は、一行の記事が頗る詳しい。又開天傳信記は唐の鄭棨の撰で、一卷本が百川學海乙集、重編百川學海丙集、學津討原第十六集に收められてゐる。以上の記錄は皆唐代の、しかも一行の入寂を去る百年乃至二百年前後の筆錄と目せられるものであるから、此が一行傳研究の重要な資料であることは疑ひない所である。たゞこゝに注意すべきは、此等の著錄の性質が正しい歷史的性格を持つものとは考へられないから、此が傳を製作する場合に、直ちに此を第一資料とするといふことは極めて危險であつて、此の點舊唐書、宋高僧傳の記事も可成り批判的に再檢討せらるべきものなることは、敢へて言ふ迄もないことである。

然るに一行傳を研究する者にとつて、今一つ注意すべきは唐代に於ける日唐交通史上の入唐僧の業績である。我が國の眞言宗の開祖であり、眞言密敎の眞の大成者ともいふべき弘法大師空海が入唐したのは桓武天皇の延曆二十三年(八〇四)卽ち唐の德宗の貞元二十年であり、その歸朝は平城天皇の大同元年(八〇六)卽ち唐の憲宗の元和元年である。又天台宗の開山傳敎大師最澄も年を同じうして入唐し、翌年七月歸朝してゐる。延曆二十三年は一行の滅後僅かに七十七年の後であり、空海は歸朝の後淳和天皇の天長六年(八二九)眞言付法傳一卷、卽ち略付法傳を撰して一行の傳を記してゐる。天長六年は唐の文宗の太和三年に當り、此が一行傳研究として如何に權威あるものであるかは此に依つても知られよう。殊にその中に引用せらるゝ玄宗皇帝御撰の一行禪師碑銘なるものは、舊唐書宋高僧傳以來矢釜しいものであるに拘はらず、彼の地には全く滅んでその全文が獨り我が國にのみ傳はつたもので、一行傳研究の無二の資料であることは最も愉快に堪へない所である。又最澄は歸朝の後嵯峨天皇の弘仁十年(八一九)卽ち唐の憲宗の元和十四年に內證佛法相承血脈譜を撰してゐるが、その中、胎藏金剛兩曼荼羅相承師

師血脈譜の條に一行大師の傳を詳しく紹介して居り、此亦一行傳研究の有力な資料と言はねばならない。此の外わが國では後冷泉天皇の康平三年（一〇六〇、北宗仁宗の嘉祐五年）に成尊僧都の撰した眞言付法纂要鈔一卷、承澄の阿娑縛抄卷一九四、玄棟の三國傳記卷二等があつて、此が研究に資する所が少くない。

以上は一行傳研究資料の主なるものであるが、此の外唐會要、新唐書、弘簡錄、唐文粹、全唐文、文獻通考等を擧ぐれば枚擧に遑がない。併し其等はまとまつた資料ではないから、必要に應じて紹介して見たいと思ふ。なほ新唐書五九藝文志四九に李吉甫の一行傳一卷があつたと記されてゐるが、今日傳はらないのは殘念である。李吉甫（七五八—八一四）は憲宗の朝廷にあつて宰相として敏腕をふるつた人で、有名な元和郡縣志の撰者としても知られてゐる人である。その一行傳の散逸こそ惜しみても餘りあるものと言ふべきであらう。

三

一行は俗名を張遂と呼び、魏州昌樂（河北省南樂縣）の人ともいひ、又鉅鹿（河北省鉅鹿縣）の人ともあり、何れが眞であるかはつきりしない。鉅鹿南樂は共に河北省の南にあるが、その距離は稍隔つてゐる。彼は唐初襄州都督であつた鄭國公謹の曾孫といはれ、父懷は太僕丞であつた。その母は隴西の李氏、唐の高宗の弘道元年に生る。彼は托胎の日、母の額上に二三寸の白光が現はれ、此に依つて十歲の時、父が神童の科擧に上さんとしたが、母の反對するところとなり、此が後年彼の出家の機因となつたものゝ如くである。彼は幼少から聰明の譽高く、十五歲にして博く經史を披翫し、九流を學んだが、二十一歲卽ち則天武后の長安三年（七〇三）に二親を失ひ、遂に厭世の志動き、荊州玉泉山恒景律師に從つて出家したのである。彼の學問は禪を嵩山大照禪師普寂に習ひ、戒律を當陽の僧眞に學び、密敎を洛陽廣福寺金剛智并びに洛京聖善寺善無畏に受けたものである。又彼が恒景より天台を相承せることも種々の文獻が證明して誤らない所である。例へば智證大師圓珍の作と稱せられる諸家敎相同異集には、

相傳云。章安大師弟子道素律師。道素律師弟子弘景律師。弘景律師弟子一行阿闍梨也。

といひ、智顗—灌頂—道素—恒景—一行と相傳へて行

つたことを物語つてゐる。此に依つて仁空の大日經義釋捜決抄一に山王院記を引用し、

一行和尚亦智者第四弟子也。會於當陽弘景禪師、久習天台法華止觀。

と記してゐる。又仁和元年(八八五)即ち唐の僖宗の光啓元年、安然の撰した胎藏金剛菩提心義略問答抄一に依れば、「此是天台宗一行和上」といひ、同三には「一行和尚元是天台一行三昧禪師。能得天台圓滿宗趣」とも述べてゐる。[7]恒景は天台を道素に承けたばかりでなく、戒律を終南山道宣に受けたことは、凝然の律宗瓊鑑章幷びに三國佛法傳通緣起に明記するところである。何れにせよ恒景が天台律宗の相承者であり、又僧眞の教授を經て、一行が天台と律とを享け傳へたことには疑を挾む餘地はない。

普寂[8](六五一—七三九)は北宗禪の派祖神秀の高弟で、神秀の滅後その法衆を統領し、一代に重きをなした教界の實力者である。此に依つて一行の禪は北宗を相承してゐることが解る。榮秋の大日經疏緣起にとのことを記し、

准禪門師資承襲圖所示、第五祖弘忍大師門下、有二弟子。一是惠能。即南宗也。一是神秀。即北宗也。弟子名曰普寂。即疏主(一行)之師也。

と記してゐる。僧眞に就いては今彼の傳記を明かにする何等の手係りを持たない。山川智應氏は現代佛教第七卷第七三號(昭和五年五月)に於いて、「中唐に於ける天台宗と一行阿闍梨の法脈」なる論文を發表し、僧眞を鑑眞であらうといふ私見を述べてゐられるが、其は單に私見に止まり、何等の根據なき憶測であるから、此に從ふことはできない。[9]

[10]金剛智(六六二—七三二)は梵名を跋日羅菩提(Vajra-bodhi)といひ、那爛陀寺その他印度セイロン南海を遊歷して開元七年長安に達し、密教の弘通に貢献した人で、眞言付法の第五祖として、その翻譯は主として金剛頂部の經典を傳へてゐる。空海の祕密曼荼羅教付法傳即ち廣付法傳の金剛智條に、

沙門一行、欽斯祕法、數就諮詢。和上一一指陳。後爲立壇灌頂。一行敬受斯法、請譯流通。

と述べてゐる。又善無畏(六三七—七三五)は眞言宗傳持の第五祖として知られ、梵名を戍婆揭羅僧訶(Çubhakara-simha)と呼び、淨師子と譯すべきであるが、

義翻して善無畏といひ、略して無畏と稱するといはれてゐる。彼の來朝は開元四年で、その來朝の經路は金剛智とは反對に、陸路迦濕彌羅烏萇國突厥吐蕃の地を經て長安に達した。彼の譯經中最も特筆大書せらるべきは大毘盧遮那成佛神變加持經七卷卽ち大日經の翻譯で、本經は胎藏部の根本聖典として金剛部の金剛頂經と並び稱せられる密敎の最重要聖典である。一行の大日經疏二十卷は、善無畏の譯場に參じて筆受の役を果しながら、その口說を記錄して出來上つたもので、大日經研究の祕鍵と稱せられるものである。一體大日經の原本は、唐の高宗の乾符二年(六六七)入竺して彼の地で病歿した支那僧の無行が、人に托して唐へ送り屆けた六卷本と、善無畏感得の一卷とを合冊して翻譯したもので、一行の疏はその中前六卷三十一品に就いて註釋を加へたものである。然して大日經の翻譯は開元十三年に譯了したので、一行は疏の完成に力を注いだが、未だ再治に及ばずして歿して了つた。東密所依の疏はこの草稿本である。然るに一行はその滅時、之が再治を弟子の智儼、溫古等に托したので、その再治本が義釋と呼ばれ、いま台密所依の疏となつてゐる。斯の如く一行の密敎史上に占むる地位は非常に重要なる意義を持つもので、彼が密敎の二大眼目たる金胎兩部を相承し、遂に傳持第六祖となつたことは、まことに由ありと言ふべきであらう。

四

一行の學問は單に佛敎學のみに止まらず、博く陰陽讖諱算法に通じ、殊にその天文曆法の知識は遠く他人の追隨を許さぬものがあつた。此は彼の强記と結び合せて理解せられねばならない。

一行が玄宗に召出されたのは、舊唐書一九一、弘簡錄五九等に依れば開元五年(七一七)彼が三十五歲の時であつた。[11] 此より先、彼の學行の譽が高くなるにつれ、彼と交りを求むる者が多く、彼の則天武后の一族で當時權勢を恣にした武三思の如きも彼に近づかんとしたが、一行は逃げて嵩山に隱れたといはれてゐる。その後睿宗が東都留守韋安石を使者として鄭重に彼を召出さんとしたが、この時も疾と稱して起たなかつた。玄宗の使はその族叔禮部郎中洽で、其の最初の對面の際玄宗が彼の記憶力を試驗し、思はず御榻を降つて一行を禮し、聖人と稱したことが傳へられてゐる。[12] 此より

一行の信任は日に厚く、光大殿に置いて訪ふに安國撫人の道を以てせられ、開元十年(七二二)永穆公主が王繇に下嫁せらるゝに當り、玄宗が過度の仕立てを飾つて之を送り出さんとした時も、彼は太平公主の故事を引いて切諫してゐる位である。此に依つても一行が、當時廟堂で如何に有力であつたかゞ察知できると思ふ。

支那に於ける曆法の研究は、唐文粹九四、全唐文二二五に載する宰相張說の大衍曆序にも見ゆるやうに、太初より麟德曆迄二十三家を數へる程多かつた。然るに開元九年(七二一)になつて、それ迄使つてきた麟德曆の日蝕が屢合はなくなつた。そこでどうしても新曆を作製する必要に迫られ、その第一の候補に上つたのが一行である。然してこの時一行を朝廷に推薦した人は前述の張說であつた。そこで一行は曆法を制定するに就いてはどうしても天體の觀測を行はなければならぬので、直ちに上奏して之が觀測器の製作にとりかゝつた。此が所謂黃道游儀であつて、彼は之を當時の天文家として知られてゐた梁令瓚と協力して開元十三年に完成してゐる。舊唐書三五志一五天文上の條にこの時のことを述べて、

於是玄宗親爲製銘、置之於靈臺、以考星度。其二十八宿及中外官、與古經不同者、凡數十條。

と記してゐる。一行は又玄宗の詔を受けて梁令瓚と銅を鑄て圓天に象つて渾天儀を造つてゐる。此は出來上ると水運渾天俯視圖と呼ばれ、武成殿に置いて百寮に示したもので、當時その精妙なる科學的知識は曾く驚嘆せる所であつたが、間もなく機械が錆びて動かなくなつたといふ。兎も角一行は此等の機械を利用し、開元十二年には使を諸州に分遣して天體の觀測を行はんとしてゐるのであつて、彼が大衍圖とか覆矩圖を作つたといふ記錄から見ても、それが決して机上の空論でなかつたことを證明するものである。

一行の曆は開元十五年(七二七)その草稿ができただけで一行が死んだので、玄宗は更に特進張說と曆官陳玄景等に詔して之を完成せしめ、明年八月張說が此を開元大衍曆と名づけて奉獻し、十七年より頒行せしめた。新舊唐書の曆志は殆んどこの開元大衍曆の轉載と言つてよい位で、歐陽修も此を、

自太初至麟德曆、有二十三家、與天雖近、而未密也。

至一行密矣。其倚數立法、固無以易也。後世雖有改作者、皆依倣而已。

と激賞してゐる。併し乍ら、強ひてその缺點を擧ぐれば、本曆はその名の示すが如く、周易大衍の數より推して術を立てたものであつて、朱文鑫もその曆法通志に、清の阮元の疇人傳一六の言を引いて、

⑲ 條分縷晰、旁證博引、爲唐曆之冠。惟依易蓍之數、爲立法之據。不免附會牽涉。疇人傳論曰。昔人謂。一行竄入於易、以眩衆。是乃千古定論也。

と述べてゐる。又舊唐書三二志一二曆一の條に依れば本曆はその後五十年近く行はれたものゝ如くである。

五

開元十五年前九月、一行は京師華嚴寺に於いて疾篤く、玄宗は心痛の餘り彼のために大道場を立てゝ福を祈らしめたがその功なく、十月八日新豐に隨行して遂にそこで示寂したものである。時に年四十五、依つて遺骸を罔極寺にとゞめ、錢五十萬を出して塔を銅人原に建て、大慧禪師の諡號を賜はり、帝自らその碑銘を製し賜うた。翌年又玄宗は溫湯に行幸の際、一行の塔前に駐輦して惜別の悲しみを表はし、松柏を蒔かしめられたといふ。以て彼が如何に人君の眷顧を厚くしたかゞ想像できるであらう。

一行の逸話は今澤山傳はつてゐる。否寧ろ彼の傳記はかゝる眞僞不明の傳說のために、その眞相が捉ひ難い憾みがある。併し偉人の傳には必ず此に附會する傳說があり、此が又その人の性格を最もよく表現してゐる場合が少くないから、以下少しく此を紹介して一行傳の補遺ともして見たいと思ふ。

その一。⑳一行は幼時家が貧しかつたので學費がなかつた。偶、隣に王姥なるものがあつて、彼に數十萬を與へて勉强させてやつた。一行が出世してから、王姥の子が殺人罪で獄に附されることになつた。姥は早速一行を訪ね、一行の力で命乞ひをしてもらはんとした。併し一行は王法の枉ぐべからざるを說き、錢でできることならいくらでもお返しするがと言つたら、王姥は大聲で彼を罵つたので、一行も詮方なく渾天寺中に呪法を行ひ、大赦を奏請して王姥の子を助けた。

その二。㉑一行が大衍を學ばんとして諸方を遊訪中のこと、天台山國淸寺の古松ある一院で算法を求めんとした。然るに一行の至るや東流してゐた門前の水が忽

ち逆に西流した。

その三。[22]一行が普寂門下にあつて嵩山で勉強してゐた。一日寂は大いに群僧を集めて施食し、集るもの千餘人に及んだ。その時隱士盧鴻なる者があつてその大會の讚嘆文を作り、寂の門下をして之を讀ましめんとした。然るに鴻の作文は文字がゆがんで且つ言葉が譎怪であつたので、之を讀む人はよほどの人でなければ讀めないとのことであつた。その時召されたのが一行で、彼は立つて卷紙を伸ばすと一覽してにつこり笑つて之を机の上に置いた。盧鴻はその輕卒なるを怪しんだが、いよ〳〵衆僧の一堂に會した時一行が袂を攘つて進み、音吐朗々として一字も誤らないのに愕然として驚き、「これはとても君の教ふべき人物ではない」と普寂に語り、一行をして遊學の途に上らしめた。

その四。[23]一行が嘗つて道士尹崇の所に至つて楊雄の太玄經を借りたことがある。數日の後彼がその本を返しに行くと尹崇は驚いて、「此は意旨深遠で、自分は數年かゝつてもその意味の通ぜないところがあるのに、貴公はもう返すのか」と言つた。そこで一行がその撰した大衍玄圖幷に義訣一卷を示したら、崇は大いに嘆じて「後生の顏子」といつたといふ。

その五。[24]邢和璞が漢の洛下閎の言を引いて、尹愔に「一行は聖人か」と言つたことがある。

その六。[25]一行はもと碁を知らなかつたが、たま〳〵張說の宅で王積薪の碁局を見、遂に之と對等で布局した。彼は笑つて張說に言ふやう「此はたゞ先手を爭ふだけである。若し我が輩の四句を念じたならば、更に自在の手が打てる」と言つたので、人々は國手であると言つたといふ。

その七。[26]開元中日照りが續き、玄宗の請に依つて龍を下して雨を降らせた。

その八。玄棟の三國傳記卷二、一行阿闍梨事の條に一行が楊貴妃を相して玄宗の逆鱗に觸れ、果羅國へ流される途中、「九曜の星の圖」を描いたとあるが、此は一行の九曜星圖に關する後世の附會の說と思はれる。

その九。[27]開元中玄宗が東都に幸し、秋霽の天宮寺閣に登つて眺望を恣にせられた時、帝が「我甲子終に恙なきを得んや」と凄然として長嘆せられた。すると一行は「陛下行幸萬里、聖祚無疆ならん」と申上げたとのことであるが、その後帝が蜀の萬里橋に幸し、始め

てその意味が解つたといふ。

その一〇。太平廣記一四〇卷に廣神異錄を引き、開元十五年一行寂滅のとき、表を奉つて「後愼んで宗子を相となし、蕃臣を將となす勿れ」と言つたが、それは李林甫と安祿山のことを豫言したものとされてゐる。

その一一。一[28]行は又臨終に遺物一封を獻上した。玄宗が開いて見ると「蜀當歸」の三字が書いてあつた。初め帝はその意味が解らなかつたが、蜀に行幸するに及んで深く之を嘆異した。

その一二。開元[29]中河南の尹裴寬が佛敎を好んで一行の師普寂に師事した。一夕彼は普寂の所へ訪ねて行くと、その日に限つて普寂は小用があるからと言つて、彼を別室に休憩させておいた。間もなく普寂がその居室を清潔にして香を焚いて端坐してゐると、「天師一行和尙の御入來」といふ聲がして、一行がはいつてきた。二人は禮を交すと、普寂は一行の耳に何か囁いたが、一行はたゞ「よし、よし」といふだけであつた。やがて一行は階を降ると南堂に這入つた。その時普寂は弟子をして鐘を撞かしめたが、其は一行の示寂と同時であつた。後裴寬は徒步して一行の葬式を送つたが、その佛敎に對する厚禮は搢紳の譏りを招いた程であつた。

右の外、一行の交友に就いて一言すれば先づ當時の宰相であつた特進集賢院學士修國史上柱國燕國公張說があり、一行を玄宗に薦めたのも張說であれば、一行の造つた大衍曆を完成して玄宗に奉獻したのも張說であつた。張說の大衍曆序は前述の如くであるが、此の外全唐文二二二には開元正曆握乾符頌、同二二三には賀大衍曆表が殘つてゐる。又同九一四には一行の答張燕公書が傳はつてゐる。大唐新語卷一、匡贊第一の條に張說のことを述べて、

引文儒之士、以佐王化。得僧一行、贊明陰陽律曆。以敬授人。

とあるはこの間の消息を傳へて餘りあるであらう。又河南の尹裴寬との關係は前記の通りであるが、舊唐書[30]八八列傳三八蘇州吳縣の人陸元方の條に、その子象先、景倩、景融、景獻、景裔等のことを述べ、

僧一行、少時嘗與景先昆弟相善。常謂人曰。陸氏兄弟、皆有才行。古之荀陳、無以加也。其爲當時所稱

如此。

と言つてゐる。象先は本名を景初といひ、開元二十四年七十二歳で卒し、尚書左丞相を贈られた人であり、景倩は監察御史に、景融は左右丞工部尚書、景獻は殿中侍御史、景融は河南の令となつてゐる。

六

一行の著作中最も重要なるものは佛教では大日經疏卽ち大毘盧遮那成佛經疏二十卷であり、佛教以外では開元大衍曆一卷である。いま大正藏經中より彼の關係した譯出佛典幷に撰述を列擧すれば次の如くである。

一、大毘盧遮那成佛神變加持經七卷　善無畏共譯
二、金剛頂經毘盧遮那一百八尊法身契印一卷　善無畏共譯
三、藥師琉璃光如來消災除難念誦儀軌一卷　一行撰
四、大毘盧遮那佛眼修行儀軌一卷　一行記
五、曼殊室利焰曼德迦萬愛祕術如意法一卷　一行撰
六、宿曜儀軌一卷　一行撰
七、七曜星辰別行法一卷　一行撰
八、北斗七星護摩法一卷　一行撰
九、大毘盧遮那成佛經疏二〇卷　一行記

右の中、大日經とその疏に就いては上述した。藥師消災儀軌は藥師法の本軌として名高いものである。又第五の曼殊室利法は大威德明王の法を行ふ雜密軌として知られてゐる。此の外圓仁の入唐新求聖教目錄、安然の諸阿闍梨眞言密教部類惣錄卷上等に依れば、

一〇、最上乘受菩提心戒及心地祕決一卷　無畏流出
一行記
一一、攝大毘盧遮那成佛神變迦持經八蓮花胎藏海念悲生曼荼羅廣大念誦儀軌三卷　無畏譯　一行筆受
寶月譯語
一二、調伏藏十卷

等が擧げられてゐる。調伏藏は舊唐書の一行傳、弘簡錄に謂ふ攝調伏藏なることは言ふ迄もない。又佛教以外の資料中では、新唐書卷五七、同五九の藝文志中に一行の著作として次の如く十七部の多數を擧げてゐる。

一三、周易論卷亡
一四、大衍玄圖一卷
一五、義決一卷
一六、大衍論二〇卷

一七、釋氏系錄一卷
一八、開元大衍曆一卷
一九、曆議十卷
二〇、曆立成一二卷
二一、曆草二四卷
二二、七政長曆三卷
二三、心機算術括一卷　黃栖巖注
二四、天一太一經一卷
二五、遁甲十八局一卷
二六、太一局遁甲經一卷
二七、五音地理經一五卷
二八、六壬明鏡連珠歌一卷
二九、六壬髓經三卷

七

上來一行の傳とその著作を大方紹介したつもりであるが、此に依つて教界幷に俗界に占むる彼の巨歩が大方了解できると思ふ。然るに一行の如き僧俗に亘る偉大な人物でさへ今迄單に一部の人の間にその部分的功績しか認められてゐないことを知れば、その他の人々が、その教界に盡した功績を認めらるれば國家社會學界に貢獻した努力が忘れられ、その國家社會學界に盡した貢獻が認めらるれば教界に於ける實際の仕事が理解せられなくなるといふことは當然のことであらう。かゝる意味に於いて、教界で正當に認識せられなかつた人物、一般文化史上に於いて僧侶なるが故に冷遇されてきた人物を紹介することは、歴史家の重要な任務の一つではないかと思ふものである。沙門一行は密教史上からいつても、曆術天文史上からいつても、最も重要な人物であることはいふ迄もないが、彼の眞價はその兩方面から正當に評價されねばならない。貧しい一文を草して、識者の御批判を乞ふ次第である。

註

①一行傳の研究論文には長谷寶秀氏の「一行阿闍梨」(明治三五―一〇・一一、遍照六―一〇・一一)、六大新報五三八・五四七(大正三―一・三)所載の「一行禪師傳」、岡崎密乘氏の「一行阿闍傳記考」(密宗學報二八、大正四―一〇)、山川智應氏の「中唐に於ける天台宗と一行阿闍梨の法脈」(現代佛教七―七二・七三、昭和五―四・五)等があり、山川氏の論文は稍參考とするに足るも、他は殆ど顧みるに足らない。尚ほ大村西崖氏の「密教發達志」五卷(大正七年刊)あり、その三卷 p. 451 に一行傳あり、一讀せられたい。

②舊唐書一九一、列傳一四一。

③宋高僧傳五。

④略付法傳、內證佛法相承血脈譜所引の釋氏要錄、太平廣記引用の大唐新語に依る。宋高僧傳は支孫といひ、舊唐書は孫に作る。

⑤略付法傳、釋氏要錄に依る。舊唐書は擅に作り、武功の令といふ。

⑥釋氏要錄に依る。略付法傳には十五歲のこととすれども文獻通考三五、選舉考八童科に「唐有童子科。凡十歲以下、能通一經及孝經論語、每卷誦文十通者、予官。通七者、與出身」とあり、同卷二九、選舉考二、舉士條等に依り、釋氏要錄に從ふ。

⑦宋高僧傳五には彼が覆州山玉泉寺に入り、智者の蹤を追つて、止觀を學んだと記し、又凝然の律宗瓊鑑章には「弘景律師、與台宗殊持殊特。是南山重受戒弟子」とあり、同じく三國佛法傳通緣起には「弘景是南山律師親度授具弟子。隨章安大師、學天台宗」ともいはれてゐる。恒景は一に弘景に作り、宋高僧傳には律師文綱の弟子とあるも疑はしく、凝然の南山親度の弟子とするが正しい。此は前引山川氏の論文を見れば明瞭である。又凝然は恒景を章安の弟子と言つて居り、此の說は佛祖統紀一〇章安旁出世家の弘景の傳にもあるものであるが、此が誤りなることも亦山川氏の說の通りである。兎も角恒景の傳に關しては疑義が少くないので、その詳細の研究をも近いうちにしてみたいと考へてゐる。

⑧宋高僧傳には諡を大慧禪師に誤る。大慧は弟子の一行の諡號である。大照禪師の號は舊唐書一九一、列傳一四一內證佛法相承血脈譜、眞言付法纂要鈔に依る。

⑨弘簡錄五九には彼を悟眞と言つてゐる。

⑩開元七年來朝のことは、彼の金剛頂經義訣に「於開元七年中、至於西京。一行禪師、求我灌頂」とあるから、眞言付法纂要鈔の「開元八年、金剛智東漸」の說は誤と見なければならぬ。

⑪佛祖統紀四〇は開元三年條に記すも、佛祖歷代通載は五年三月八日のこととす。

⑫酉陽雜俎五、明皇雜錄、太平廣記九二、佛祖歷代通載一三。

⑬舊唐書一九一、唐會要六、資治通鑑二一二、弘簡錄五九、佛祖歷代通載一三。永穆公主のことは新唐書八三列傳八玄宗二十九女の條に「永穆公主、下嫁王繇」と記載されてゐる。

⑭舊唐書三五志一五天文上、新唐書三一、天文志二一、新唐書二七上曆志一七上、唐會要四二、通鑑二一二開元九年條、弘簡錄五九、佛祖歷代通載一三、朱文鑫の曆法通志一四八頁等參照。太平廣記二一五引用の大唐新語（稗海本卷一三）に依れば、編纂は始め光大殿で行はれ、後麗正殿に移して行はれた。

⑮舊唐書三二志一二曆一條。

⑯張說、大衍曆序。新唐書二七上曆志一七條、文獻通考二一九參照。

⑰ 新唐書二七上曆志一七上、曆法通志。

⑱ 新唐書二七上曆志一七上。

⑲ 一行禪師碑銘、內證佛法相承血脈譜、舊唐書一九一、宋高僧傳五、佛祖歷代通載一三、弘簡錄五九。

⑳ 酉陽雜俎一、明皇雜錄補遺、太平廣記九二、佛祖歷代通載一三。

㉑ 酉陽雜俎五、明皇雜錄、明皇雜錄補遺、太平廣記九二、冊府元龜八六九、舊唐書一九一、宋高僧傳五、弘簡錄五九。

㉒ 酉陽雜俎五、明皇雜錄補遺、太平廣記九二、宋高僧傳五。

㉓ 酉陽雜俎五、明皇雜錄補遺、太平廣記九二、舊唐書一九一、宋高僧傳五、弘簡錄五九。

㉔ 酉陽雜俎五、明皇雜錄補遺、太平廣記九二、舊唐書一九一、宋高僧傳五。

㉕ 酉陽雜俎一二、太平廣記二二八。

㉖ 酉陽雜俎三、太平廣記三九六。

㉗ 傳載、松窗雜錄、松窗雜記、太平廣記一三六。

㉘ 開天傳信記、太平廣記一三六。

㉙ 酉陽雜俎五、明皇雜錄補遺、開天傳信記、太平廣記九二宋高僧傳五。

㉚ 冊府元龜七八三引用。